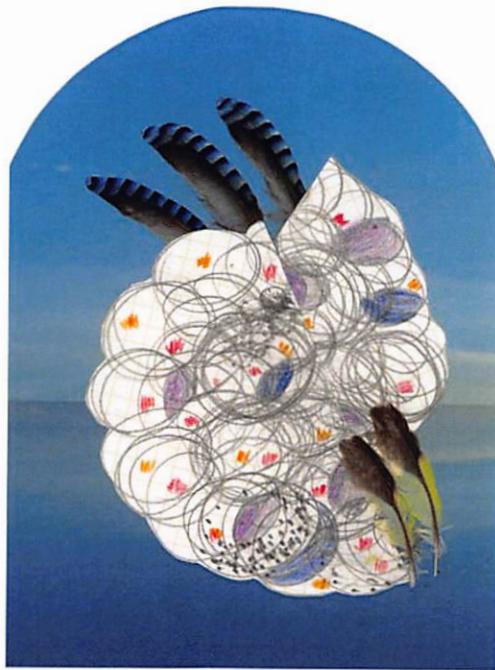


地中海

MARE MEDITERRANEUM

2021.12



令和3年12月1日発行(毎月1回1日発行)第69巻第12号

No.763

創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の鄉愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生史的なものだ。別ないかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しました北上した、すべての未開なものを同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みんなおなじ気持であこがれる。

源泉的精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地中海

一〇二一年一二月号 (通巻七六三号)

◇一〇二一年の収穫より

久我田鶴子・選 2

■作品[A]

A C B A

神田鈴子・菊地栄子他

片倉ひろみ他

川上悠子他

久保洋子他

中村恭子他

■オリーブ集

餅井辰視・桃原佳子

◇今月の二人

中村里美・かがわじつお

香川進の生きものの歌 38

田土成彦

私と短歌との出会い (232)

佐藤光正

—『特集』丸山修あつラカルト

短歌 晩夏の雨

エッセイ 「宮本輝」について思うこと
エッセイ 文学を可視化してみる

15

今月の二人・作品評

久我田鶴子 40

最近の歌誌より

〔編集部〕

96

クリップ 97

神田通信 98

40

1

◇冬のアンソロジー 〈三冬の歌〉

石田明彦

48

■遊覧寄港 〈山と短歌と〉

皆川宏 50

玉井綾子 51

■歌壇月旦
女性がつくる

玉井綾子 51

横田敏子・仲西正子 52

浜谷久子・島根美智子 52

C 牧 雄彦 52

オリーブ集・田土才恵 52

■十月号作品批評

72

◇写真歌合せ * 作品募集……表3

一一〇一一 年の収穫より

(久我田鶴子・選)

草上手の少年そのまま見上げおれ飛行機雲が龍になるまで

川釣りに行きたる夫の土産とぞ根ごと掘りたる捩花一本

地中ふかく素数の年を数へるセミの頭脳よヒトを凌ぎて

流行物ゆ落ちこぼれたる老骨がひねくれ坂に閑居して 梅雨

救急車が絶えずゆきかうこの町をマラソン選手は駆け抜けてゆく
ベランダのサニーレタスも役目あり朝の四五枚小鳥とわたし

もうよしとマスクをはずす白々と花ニラ咲ける畠道となる

表情を隠すマスクに隠されぬ底なし沼の眼のしめり

武装する暇のなくて易易と善意の刃に斬られてしまふ

石田 明彦

磯田ひさ子

小野 雅子

北山 雪男

木村 文子

篠原まり子

関根 榮子

高尾 恭子

滝田 靖子

春雪は降るからにして溶けてゆきコロナ禍長く子は帰省せず

黒砂糖のふかき甘みのその底い苦みに似たる母の丸き背

中島 義雄

ああこれは芽吹く草木に触れて来し風のふくらむうりずんの朝

仲西 正子

打ち寄する小波藍の縞なして琵琶の湖しづかに黄昏れてゆく

西田江美子

命あれば何もいらない病より帰り来たなら これしきのフジヨーリ

西堤 啓子

九十余年生きて初めての経験を噛みしめ噛み締め帰る疏水辺

白子 れい

ガス管をゆるく巻き締めのぼりつめ零余子の蔓のよるべなきま

檜垣美保子

甘酢の中にみどり丸」と閉じこめたり若夏のみのり吾が家のきゅうり

松瀬トヨ子

灯のもとにうごくともなき影のありただ一人なるにんげんの影

松永 智子

雨降ると妻のつぶやく難聴の耳そばだてて静けさを聞く

餅井 辰視

自分の歌愛さないでどうすると鉄槌下さるわが宝なり

山下 雅子

作品 A

神田 鈴子

未治療死

・大

刈り取られし稻田にひとすぢ煙立ち夕闇のなか動く人影
縁遠き人より届く秋の色箱一杯の熟柿がにほふ
「未治療死」ニュースに初めて聞く言葉治療待ちつゝ逝きし人はや
一本釣りの鰯の刺身は隣家より今日のしとあはせ舌に溶けゆく
コロナ禍に身動きならぬ人の世にエールとなるや さくら波打つ
一年余会へざるままに逝きし妻を想ひいまさむ臥せ給ふ師は
目を病みて視力失せゆく師を支へ温かなりき奥様の笑み

菊地 栄子

美しき春

・湾

サイレンを鳴らす二台の引力に容易くなびくバス待つ我等
ネックレス指輪イヤリング振り落とし何もなき身の軽やかなこと
細やかな葉っぱが路上にへばりつく音立てる
三ミリ程片上がりする額縁と見てる治療の終わらぬ椅子に
菜の花のつぶらな蓄湯通しし浅漬けおひたし美しき春
スポーツ店閉じられ書店の棚の奥アニメ・コミックスベース広ぐ
真田丸のバイオリンの音コキコキと奏でてはじむ歯磨きのとき
薄い黄をまとった風の海がある 三個の石をまなこは生みたり

北山 雪男

残日抄

・伊

京都駅、新羅城門 底冷えの家並みこれより北へ連なる
通り抜け出来るか否か知らざるも口開けて待つ京の暗がり
下京の路地に降る雨まさびしく軒端伝ひに視し昨日の間
つつましく微睡む真昼、逝く春の書架に腐蝕の記憶並べて
子の帰りを待ちし日ありき産院よりまた流離の若き間より
核家族、爆弾家族 年旧りて爆けてほろり孫授かりぬ
その母の血筋色濃く肌白く孫は道産子札幌育ち

木村 文子

三個の石

・羊

左目に糸ひく涙があふれだす日本のどこかに梅雨が来るころ
口中にフルーツゼリーは崩れゆき鏡のなかには変わらぬまなこ
病院のまるき静謐いつもより厚い空気に圧されておりぬ
目蓋の裏に小石があるらしく〈取りましょうか〉と問われておりぬ
まなぶたを開かれ虹が散らばりぬ ひとつわ輝くピンセツトあり
重き水跳ねあげ光は潛りゆくさざなみひとつ心にたてて
薄い黄をまとった風の海がある 三個の石をまなこは生みたり

草刈十郎

冷や奴

・世

小林能子

「果てなしばなし」

・羊

夏草に挑む人あり老いし人意氣はよけれど無理は禁物
 ビール酌みながら夕日をながめをり神のみが知るわが命なり
 知人めく人と出会いへりとりあへず会釈してみるサングラスかな
 メダルめさしオリ・パラリンピック炎天下悲喜こもごの夏は終れり
 接種終へ蜩のこゑ改めていくばくもなき余命思へり
 八月とふ月は日本の忌なりけり原爆敗戦そして腹へこ
 楽しめるほどの貧乏冷や奴冷酒酌むなりテレビに向かひ

国井節子

明日香美女

・春

永かりしコロナ禍を経て晴れて今日腕まくりしてワクチンを待つ
 水張田の上を飛び交ふケリ夫婦カラス相手にけたたましかり
 ひるがへりひるがへりつつ地をこすり燕はぶくらむ土にまみれて
 森の木を吹き抜けて来る青き風この道ゆけば古代につながる
 ほの暗き古墳の壁の明日香美女長きスカート夢まぼろしか
 週一度卓球に行くいつもより早寝早起き、体調とのへ
 手の平の皺の中なる生命線じつと見てをり秋は暮れゆく

河野繁子

風の音

・雁

タベみし「蝉しぐれ」まだ残りいて霜おく朝のかたくりの花
 風の日の芹葉おうれん葉のなきに春を持ち上げ線香花火
 風の音受話器にとらえウォークリング最中の人の景色を貰う
 手に優し握り鉄に母の名と同じ網代の刻印みつく
 石橋をたたいて渡らぬ人なりと言わるればそう 友温かし
 あけぼの草花冠に散らす斑点を夜明けの空と見 いま卓の上
 暗闇に光のゆれて人歩む明ければ自肅の世が開けゆく

近藤栄昭

運転

・虹

紺の海うねり高まる日本海下地塗りゆくウルトラマリーン
 砂浜に白く打ちくる波の奥赤く塗りゆく夕陽の下地
 うねる線波頭の輝き波あいを幾重に描けるか海のひだを
 降る光海に射し込み海の色肌はブルーに海になりゆく
 つま先を真っ直ぐに立つ海の中青く吸いこむ見えぬ海底
 息を吐き沈む静かに海底へ小石ぶつかる音遠く鳴る
 息を吐き浜辺へ寄せて砂丸め左へ走り泡と消えゆく

近藤芳仙

運転

・信

ゆるやかにアクセルを踏むことに慣れシルバーマーク目にやきつける
 古びゆく車と路面、運転の私も似通ひバランスをとる
 十六年手足のやうに乗りまはす軽自動車のいまだ健在
 買ひ替への必要あれば車種なども少し覚える興味もわきて
 子等のいふ安全装置の着く車 乗り替へはする意に反せども
 試乗車の余りに軽きハンドルに車分野の進歩をみたり
 発注の新車遅れる報せありコロナ禍アジアの部品が来ない

朝からの暑さ真屋に極まれば思ひださるドリアンの市
 蝉しぐれはたりと止みし真昼間をサイレン低く遠ざかりゆく
 やうすをみませうと言はれしこの日々の愛はしく米磨さては炊ぐ
 長き夜はひとり懐かしむ幼らの夫にせがみし「果てなしばなし」
 団栗は風吹くまことに小川までころころボチャンころころボチャン
 寢室のカモミール茶もそのままのしらしら明けに一度寝試む
 「有難う今日も元気にしています」と応へて巢より安寧の日々

坂上直美

移ろい

・天

裏庭に小さき薔薇咲く故郷の家時折に夢に出でり
贈られし百合の香匂う君の部屋本と花と遊影は埋もれ
君在さば「ほら初雪」と起こさむ彼の時虹を見せしごとくに
久々に母の夢見き傍にて抱きしめくれぬ言葉なきま
君は今吾と共に在りひねもすを共に空を見風の歌きく
何憂う憂えてしかたのなきことは憂えぬがよし 天高く秋
微笑んであなたが迎えてくれるなら死ぬのはそんなに怖くないかも

坂出裕子

コロナ

・洛

コロナ禍に疲れしこころ川土手の道にマスクを外したたずむ
炎天の熱暑に耐へし証とぞくれなるふかく木の葉燃え立つ
いつまでも川を見てをり流れゆく水にコロナのこころ放ちて
さざ波を立てて流れてゆく水に星がきらめく秋の光の
マスクしてコロナの日々に耐ふる子が聞かせてくれる音読のこゑ
ひさびさの雨がしみゆく心地する乾ききりたる身の内ふかく
こんなにもこころ乾きてるたるかと泪湧きくる静かな雨に

佐久間景

ロマン

・湾

何することもなく一位の木ただひつそりと庭隅に立つ
自慢気に語るは大人のロマンかも寸にも足らぬ魚釣りし友の
ゆえ知らぬ地揺れの多きこの日頃棚のコケンは転がりしま
ひつそりと今朝降る雨に六月の夏には早き花の色づく
有り無しの風に揺れ咲く京鹿子夏には未だしき朱き色して
庭隅の一位の古木は声も無く日がな一日わが家を見つむ
県知事賞に大臣賞瑞宝章を飾りたる部屋は何かしら冷たきものに

佐藤道子 異常

・甲

花どきの五月さつきは散り果てぬ異常気候が日常となる
マスクの街の雨に散り敷く桐の花うす紫のやしさ匂ふ
み社に見上げる楠くすの花コロナの街に渦として併つ
四十雀小綏鶴うぐひす朝の道鎮守の杜に五Gは届かず
人と人のつながり薄くなる街に散步の犬が尾を振りて来る
猫よりも小さき犬が散歩する不思議な街よ地球は終る
遺伝子組換へかくも容易くなり果てても思ひのままになるらむ

篠原まり子 歳月

・羊

人の手に委ねられたる座敷梅競いて咲くを哀しみとして
コロナ禍に咲いても桜人の波散つても桜戀されて 危機
白内障術後思わず眼裏に五月の薔薇の映る愛しさ
閉ざさる貝が開けばシジミ汁いのち幾許私のもの
瀬田シジミタ鉢にあれば「大きいね」常に言う人傍えに在りて
ココという小鳥の体温感じつつ昼寝に覚めるゆるゆると老い
父ははと共の歳月産土はやはりまぼろし『ラストエンペラ』

柴田登志恵

仮寝の形

・天

雨あがり雲ふんぱりと青空にあまたの猫の仮寝の形

すこしづつザムザに近づきゆく気配流行のドラマがおもしろくない
気に入りの歌テスベラードろくでなしと思ひをりよいうかうかと
大梨を十五度がほど切り食ふ時を切り売ること思ひつつ
いつまでもどこへも行けぬエッシャーのだまし絵めし師走暗れ無風
かるやかに一角持つとふ歎なれど生き辛からむやその一角が
享年を二十三とふ祖母の倍生きて出会いぬパンデミック五輪

鈴木結志 大冰柱

・福

冬あらし湖波かぶり漁小屋のしぶき氷の牙城を築く

冬帝の館の樋や軒つららナルブルーの深きかがよい

月読みを水中花にし大氷柱大地にとどき地のエキス吸う

月量の七色変化輻射圧科学のしくみ物語り生む

易運勢天赦日吉事みちびくか風土記かたりべとなりてうた詠む

茶先もて露打ち花に自然美の清淨感の景色を映す

「一期一會」のはなむけ季の花活けて孫の点前にこころつつしむ

関根榮子 文机

・埼

つましく黄花の咲けり野ぼる薔薇の形ゆえ櫻樓の字あわれ

目葉の木という名前の直接さ先人の知恵いつの世からか

山歩きはるかとなりて思い出す崖上に咲きいし一本桜

貰いても忘れないし父の文机の何処に仕舞いしか書案をしつつ

思い立ち小春日和を出でて来て畑の隅の残菊を刈る

いつよりか毎日のお祓いしなくなりコロナ禍の今ふとよみがえる

七草をきざむ呪文の謎めくも「唐土の鳥が！」は悪疫さすとう

関根和美 ディスタンス

・埼

距離たもち地にあるわれらの仰ぎみる一期一會の星めぐり違う

大空に許されてあり土の星木の星近きそそのディスタンス

ひととせを行かぬ本社の引き出しのお茶の葉いまも緑たもつや

語りつつ共に歩みし幾人のすでに喪う本社へのみち

関節の伸びぬ右手に奏楽をまかすとタベ神に仕える

確執のほどけしと、いう一枚の葉書に明るむわが四旬節

降誕祭ちかき御堂のうちそとに星々は降るまたたきながら

高尾恭子 祈り

・大

おじいさんのような夫の背とおさかるドナドナドナとオベ室へ今朝

医学部の扉ひらけば卒業の袴きりりと明日の看護師

花冷えの風におされて消えゆきめ昨日のわたくし明日の約束

物音のたため屋内にライン来ぬ一人と一人の朝のはじまり

リモコンの操作わからず夫を待つ低反発のソファのへこみ

眠られぬ夜々をかさねて紫陽花のよひらを濡らす雨しずかなり

ストールに首くめつ「おらおらでひとりいぐも」田中裕子のように

高津砂千子 太陽

・風

土付きのラッキョウの皮むいている半日あめの止む気配なく

死に近き姉の望みは海だった海が見たいと遠き目をした

病む姉の体さううる力なき吾をくやしみき地団駄踏めど

探しても出口わからぬくらやみにひかりひとすじ 万葉の師の

蕗味噌をご飯にまぶしふうふうと食べるあしたの空晴れわたる

心にも力湧きくる思いのす見知らぬ町を万歩あるきて

たっぷりの墨ふくませて「太陽」と書きたるのちの心ゆたけき

滝田靖子 至福

・新

遺骨混じる土砂を埋め立てに使ふとふ記事読む苦きモカ飲みながら

雨音に包まれて眠るこの夜を異国に未だ野ざらしの屍

身を捨てる祖国はあらねさらながら身を捨てさせる國に暮らせり

もの言へば唇寒しもの言はねば心が寒しまだ咳をする

金色の小さき鳥の降る朝を旅立ち行けりさよならさよなら

夕暮れの茜の雲の曼陀羅よ極楽浄土はきつとそこにある

引きこもり過ごす休日コロナ禍の恩恵独りきりとふ至福

竹下妙子 想ひ

・霧

廃道のかたへに御座す道祖神おひとりなれど微笑み給ふ
桜花として征きたる義兄も花びらの筏に乗りて還る葉月ぞ
はつ夏の煌めくやうな空なれば翔ゆく鷺は光となりぬ
手のひらに止まりし螢のほのあかり生命線の途切れを照らす
捕らはれの身のこと蜘蛛は動かざりみづから張れる網の真なかに
ささやくは頭上に交はす樹樹の声わが想ひはも越えてゆきたり
寝たきりの替りのことば寝籠りと言ふは優しかりさみだれの夜

田 土 成 彦 冬至 宙

午前七時冬至の空のしらみそめ忘れ物のやうな半月
たそがれのやさしき光に枯れ枝がシルエットとなり空を指さす
ゆくりなく迎へくださる神ありて便座の蓋はおのづから開く
身につきしかなしみとして口すすぎ入れ歯をいれる朝のならひに
冬至の日の早き日暮れを背に負ひて今日の散歩は二十分弱
たぶたぶと湯が流れ運ぶ湯たんぽの温みは今日の一番の幸
明け方の湯たんぽに残る温もりをわが分身のことくかなしむ

田 土 才 惠 露 草 宇

・宙

一つ違ひ五人の孫の揃う日のこの先あるやコロナ元旦
間欠泉噴き上げしのちのさみしさを冬野は啜す惜むなきひかり
いきいきとひとり暮らしを楽しめる八十路をとうに越えたるきみの
ささやかな思い伝えてこと足りぬ湯たんぽの湯を薬缶に沸かし
菜種梅雨立ちはだかりて山歩き取り消しとなるコロナに押され
卒業式リモートで視る孫の世のすでに始まるじとみつむる
露草のあえかなる花染色の下書き液に滴むとし聞けり

玉井綾子 ソーシャルディスタンス・羊

エスカレーターすれ違う方向の人を凝視す君が町の駅

エスカレーターの降り口乗客は顔をかぶりて一散に消ゆ

讃美歌に番号ありて題はなしキリスト教につながれている

高速の下、黒壁に「OPEN」のネオン管あり灯らぬままに
膝かかえ校庭の隅にうずくまる彼を真似して酢漿草の咲く
就学時「ボク」を「わたし」に直されし彼女の何が兄と異なる
急な雨 君の小さな折りたたみ傘に隠れるソーシャルディスタンス

虎谷信子 仲秋

・伴

彼岸会の塔婆どきぬ コロナ禍で、おつとめはなき み寺はしづか
萩・すすき束ね供へる 滴れ縁で、仲秋の名月仰ぐ しばしを過ごす
手づくりの小さきオハギを 供へるも。古きならはし共にいただく
十六夜の月 殊更にめでの習ひ、更けゆく庭の しづもりてらす
立待月・居待月などの 言葉を 思ひ出させる 日頃やよろし
「名月をとつてくれると泣く子かな」故人の句など思ひ出し居り
美しき歌作りし友 今欠詠。背戸山のなき 高層マンション

中島央子 雁来月

・森

おとうとの一世を潰しし白血病花に埋れし八十五歳
逝きてより早ひとめぐり雁来月都市のつくづく法師は鳴かぬ
秋雨をふみてけぶる香煙に彼岸此岸の境目おぼろ
駐在のロサンゼルスを訪ひし日の草鞋のやうなステーキ忘れず
その妻の介護に生きし半生よ描きさしの絵の色はあせたり
秋雨に濡るる塔婆の墨のあと黙して語らずもろ手を合はず
コロナ禍の舌を氣遣ひ逝きしとふ ゆき合ひの空に半月白む

永塚節子

さくら

銀

ばかりようこ

葉

鹿

篠竹の垣根越しに聞こえくる潮の遠鳴り松を吹く風

冷え増さるおうまがときの桜花無言のうちに手招きやます

煩いをなべて遠ざけさくらさくら酔いたきものをはや散りそむる

添えられし桜の小枝卓上にいにんの春充ちたりし春

特急の踊り子号が走りゆく天城峠はしゃくなげの頃

二ヶ月の休薬ののち待ち受けるは吉かもしけぬ凶かもしけぬ

スーパーに手を伸ばし取る「くめ納豆」母生れし地のこれが一番

仲西正子

喜屋武岬

沖

戦場に追わればろぼろ引き摺りて人等が命を絶ちたる岬

喜屋武岬の切り岸に立ち見下ろせば無音はやがて悲愴なるこえ

花やうな喜屋武の岬の切り岸に落下してゆく黄に咲きしまま

慰靈の塔めぐりきたれば眠られぬ夜半に捲る「蚊帳のホタル」

泥まみれ吉永小百合の眼が光る「ああひめゆりの塔」は慘烈

雨が降る慰靈の日なり泥濘の場面の多し「ああひめゆりの塔」

生き延びし命なれども手榴弾を握らせ終わる戦争映画

萩葉子

つり橋

銀

身に近きはふたりの子のみ 淋しいときは兄に電話する

ひとりずつ渡りしつり橋あれは何処友も私も思い出せない

国道をわたりて登る不動坂家族で毎年桜みている

ふるさとの畠野がうかぶ青音と寒じめぼうれん草店頭にあり

解体の家屋のあとちにビルが建ち空が狭まるバスからの空

寒い日は「野菊」を歌うせがまれて娘は「こさむい」お気に入りらし

風はらみゅうさゆうさと竹林が何かいたげ發り日の朝

駆けめぐる春の嵐にわらわらと覚醒していく木の根草の根

知らず知らず静かになつていく日々はわたしとめぐりの船とともに

門灯の添む温とさ家のひと日の無事を告げる灯であれ

水族館さかなを見るともなく眺め友との終日京都遊びは

輪血となる手術血液製剤の薬害気付かぬまま友のきて

闕病の友への一首七日ごと「既読」に籠もる声を聴きいる

「楽しみにしているからね」に送信を続ける一首二年の途絶

浜本英美

時には

夢

文学の底辺を支えてきた誇りささやかなれどありてわが日々
大方は夫をたよりの日々にして時には自らを主張しており
今すぐ着ることもなき服あまた部屋に吊して楽しみとす
長曾我部の紋所どうかたばみの花に佇みはや疎みたり
夜桜の下に語らう男の子二人未来の夢は明るく確か
筍の内側の皮姫皮とうやさしきやまとことばの
高砂ゆりさやくごとく開きたり空もようあやしき台風の前

榎垣美保子 反り

・昂

ふいにきて鷺水面を打ちたればひかりつゝ魚はさらわれてゆく
手に触れて部屋にのこす「またあした」病室の窓の外はきりさめ
ゆうぐれにほそき雨降る土に降る音なくきたるものやさしさ
セロファンに包まれレタスと一匹のナナホシテントウ二百円なり
焼き鮎の身の反りを白き皿に置きしばしながら酒は辛口
電線に午前六時の蝉が鳴く目を凝らし立つ鳴きおわるまで
意味なさぬ「あ」を声にして叫びたり悪意のあと見えぬ青空

福田庸子

里山ぐらし

・今

夏の朝岩のしづりに身を滑め結界に咲く岩煙草群
上州の誠保ちて生ききりし伯父の声する秋風の朝
大谷産の屋根石広く敷きつめし明治の技の名主の館
夕映えを光背にする山脈の繁まりて深く秋は来にけり
山上湖を染めて光は昇りたり冬の花火の尖りしまに
包みこむ大気の厚さふくらむを遠山脈は春としめせり
ひとごゑののちのじじまを身に添はす早朝の森に鶯とるて

藤田美智子

動かぬ眼

・新

遠き記憶のなかにてわれはいつも鬼 蹤られし缶の音響きけり
雪の夜にわれの知らざる音を聴く耳を病みる君は黙して
前を向きひとりづつとる給食にほつとしてゐる少女もをらむ
ペアになる級友のをらぬ少年の動かぬ眼がわれを見つむる
知らんぶりする幼子の鼻先はふたたびかかる声を待ちゐる
抱きたる小さき頭かすかにも鉛筆の芯のとき匂ひす
日の暮れにほどよき熱を保つつ狗尾草の穂は揺れるたり

藤森巳行

彼岸花・金木犀

・銀

コロナ禍で逝きし人等の供華なるか公園の傾り彼岸花群れ咲く
ふる里の我家の墓石は小さくて彼岸花に囲まれて立つ
本家より小さき墓石父は建て彼岸花咲く丘に眠りぬ
コロナ禍のまん延の中金木犀今年も忘れず香りを届ける

金色の小さき花が風に揺れ金木犀は香り振りまく
黄金に輝く星の形して金木犀は舗道にこぼれる

奈良時代天然痘のパンデミック種痘無き世に頼るは加持祈祷

船田清子

青きあぢさる

・天

しつとりと夜気に乗り来るかをりあり地中に息づくいのちの吐息?
「はるがすみ」つひに死語となりゆくや「P.M.」のみ幅を利かせて
さやかなる風の流れにみづいろの空の真中へ抱きとられゆく
コロナ禍の思はぬ恩恵ヒマラヤの大花園をテレビの中に
一面の黄の桜草にまぎれ咲く一本のありかの「青いけし」
名のみ聞く「冬虫夏草」なる実物も水枯れ土筆の様に一本
雨に濡ればつてり育きあぢさるに逢ひたし君と二人並びて

牧雄彦

じふやく

・大

並みますあまた石仏 目、鼻、口、さだかならねと微笑みたまふ
寂山ゆ見放くる果てにみづうみが夕づく秋の日差しにひかる
次に会ふ時まで死ぬなど胸裡で友に告げつつ施設を去りぬ
人通りなほ絶えぬ夜の街角にコロナウイルスの宴はじまる
ウイルスに世は変はれども年明けて蝟梅は仄かな香りを放つ
五月雨を受けて生き生き咲く白きじふやは庭の星とかがやく
じふやくの花の白さをきはだたせ五月雨の庭明るかりけり

松浦楨子

隙間

・羊

コロナワクチン二度目も打ちし手力に道了専への段のぼりたし
愛犬の墓を設う心根の人をじのひて山を下りぬ

源氏山を背後にひとは跡形なく「少欲知足為」なる墓標
戸のすき間障子のすき間に育ちきて旧家の炉辺の暗がりに坐す

「雑飾りつふと命惜しきかな」立子の句を知るコロナの春に
友の手に育てられ今届きたる柚子の坊主を湯船に放つ

葉隠れの残るたましいと打ち合い三島由紀夫忌 半世紀過ぐ
葉隠れの残るたましいと打ち合い三島由紀夫忌 半世紀過ぐ

松瀬トヨ子

朝の厨

・沖

鍋の湯に泳がす雑魚の浮き沈み朝の厨に海原があり

幾日も人気なき窓辺あかあかとあかり灯りて緋寒桜咲く
人数多かたちも色も豊かにてコロナ戦争とたかうマスク

ケア室にちぎりては貼る野の千草山下滑は裸の大将
夏の雨とっぴんばらばら傘に降るくちなし匂うりハビリへ行く

まろまろと浮かぶ名月横切りて黒きぶつた基地へ降りゆく
朝の樹にじんじんじーんと活氣あり蝶々は花に口づけをする

松永智子

音

・嵐

音のなくたたなはる間その底に小さきあかりともしもの書く

山脈を背に建ち並ぶビルの窓夕への光を反すひととき
かなしみてこぼしことばかなしみて拾ふことなく年あらたまる

音絶えしままなるビルの夜ふかく灯をともしたり何するとなく
さめて聞く夜ふけの音なる昇降機人のいのちのあかしなること
あかときの間を行く影あはくして人ひとりなり人ひとり行く

燃えながら沈む落日見て立てりものいはざりきひとひのをはり
音のなくたたなはる間その底に小さきあかりともしもの書く

三浦好博

断捨離

・銚

死に顔はこうして皆に見らるるか友は正装に横たひをりぬ
我よりも若き母なり朝方の夢にピエタの如く吾を抱く

父の歳を十も過ぎたり野の草を煎じて飲めばシャーマンの」と
五十回の舌出しの後食事とすAINシユタインも誤嚥防止よ

コロナ禍の冬がまた来る寒がりに老いと罹災の予感ぞ眩む
迷惑を子らにかけじと断捨離に妻また迫る「要るの? 要らないの?」

舞ひ上がり地に降りそびれシャガールにグランドゴルフのコンペ優勝
中天にかかる三日月は鋼いろその弦を弾き風空に鳴る

三木まり

葉

・昂

さくら大樹の折れた枝に花満ちる子雀が集い花をついばむ

片方の手袋を握りつたどる丘を越えて海へ行く道
軽やかな音立てるように芽吹きゆく柿の若葉が陽に透けている

アルペジオゆるやかに指の動くさま柳が揺れる柳が芽吹く
歌ひとつひとに届けよ西に住む魂ひとつを乞いてやまない

詩のことばに遠く暮らせば若々と暮れる夕べの雲を見送る
中天にかかる三日月は鋼いろその弦を弾き風空に鳴る

宮本靖彦

喫茶ルーム

・凌

秋晴れと梅雨明け同時に来たやうな六甲山に錦雲立つ

午前二時家摇する風雨に目の覚めぬ颶風十四号やうやく来阪
揚羽蝶余りの残暑に音あげしか竹にすがるにそつと水やる

穢り終へて積みし南瓜の枯れ枝には咲く黄花小さく開く
病もつ人とワクチン待つ人の姿勢異なる待合室に

P C R 検査結果を待つ長し風邪ひき訪ひし医者の別室
気分よしと入院の友連れくれし喫茶ルームが最後の笑顔

三 好 聖 三

喫 煙

・伊

もとむらしげと

授 業

・そ

花斑しほどではないがおおらかに咲けばおのずと仰ぐひまわり
わくらばを爪にかけつつ跳ね上がる猫におだしきおさあきのかげ
知ることは別れの兆しでもあって、爾々として戀をさす朝
本当のことを言うから嫌われる?おおいに笑うスピノザは朝
普遍への意識の薄い体験記読み終え煙草を吸いに出かける
蠱惑めく美輪明宏の声ありて山の桜はほどろにひらく
喫煙は水道のよこ擁壁に凭れて見入るヒヨドリの嘴

御 代 田 澄 江

きらきらと

・茨

仏桑華ハイビスカスの花白く甦りくる昔日杳し
白樺の古りてぞ蟻の巣となりぬ樹木も我も共に古りたり
物買ひに行け旅行に出よと言はれては皆少しづつ大胆にならずや
何となくなんとなくとて今日も亦死を押しやりてそこそこ昏れぬ
すみれ咲くそのみあかく日の差して寒の空気のびりりと澄めり
針供養二月八日を忘れるきマスクを縋ひし日もありたるに
きらきらと光遍き春の日に孫大学へと進路決まりぬ

茂 木 艳

塩坂峰

・埼

ゆきゆきて綴ぎ上りに変わりたりしだいにマスクの邪魔になり出す
すたすたとわれを越しゆく人の背に漲る力もはや戻らぬ
なんとなく足腰弱りドクターの歩け歩けに戦時ひびけり
小ぶりなるガラスの灰皿窓の辺に十年一日師の紫煙恋う
月々の篤き卒直なる教えじわりじんわり発醉つづく
蒼天のいすこ目指すや真赤なる風船ひとつ見る見る小さし
ちちははの瞳まじかりし心根をしみじみ偲べり 風鈴が鳴る

山 野 幸 司

奉 天

・沖

吉野屋の轍のHAPPYGYUYEAR!面白いから食べて帰るか
錢屋五兵衛の雅号龜巣にある日ふと室鳩巣との類似を思ふ
山中の塩の井戸跡を訪ねゆく塩坂峰十四年ぶり
雨晴れてふたたび起る蟬の声穂田を隔てて聞こえるなり
甲子園画面に映る外野席がらんと寂し球児のこの夏
山裾にツルボの花が秋を告げつくづく法師の声も細りぬ
半寿なり眼のうちの遺精などいつか覚えず遠のきてゐる

丸刈りの乙女等顔は黒々と女を隠し貨車に乗り込む
奉天の夜は冷え込み抱き合う乙女らの上星は輝く
行く秋の愛しみ落とすヤマモミジ孫のひらかわゆく聞く
冬の陽を逃がさぬように戸団そと疊みて部屋に持ち来る
部屋中の置かれし孫のぬいぐるみみんな笑顔に我見つめおり
雪の中学校行かぬ行けど探め玄関先に娘と孫の立つ
空鞄から孫大手振り学校こっこ大きな声で

隣室に入りゆかんとすれば廊下にて「先生、こっち」と子らが手招く
質問に答える一人の生徒の声がみごとにハモリ皆が笑いぬ
予想せぬ答が続きゆるやかにすれてゆきたる板書計画
素直なる子らがいきいき声を出すBクラスの授業はにぎやかなりき
ポケットの縁にチヨークの粉をつけ今日三コマの授業を終つる
プリントの裏に授業が楽しみと走り書きあり「山月記」終え
もの言わぬ子が貸しくれし一冊の本みじかき言葉を添えて返しぬ

山 下 雅 子

風 鈴

・習

山本 孟

身辺記

・大

吉永惟昭

妻の被爆日

・熊

千里寺の夕べ撞く鐘冬の日を生くる町並に沈むこと消ゆ
犬猫の命の果てまでわが鶴たもたで飼はず独り身の居間
眼鏡かけ補聴器もかけコロナ禍の真夏にマスクかけるわが耳
星のなき今日もたつきの灯の満つる夜長を破る炎とサイレン
独り身の今日の灯下は童話屋の『ポケット詩集』ふつと泪す
ベランダにかがみ球根植ゑんとせし妻の置きたるままのスコップ
たがやして土に気を入れ種を播き、時を待ちをり春夏秋冬冬

養学登志子

氷がとける

・凌

姪の子らの高祖父のこと話すとき「私のじじ」と誇らしく言う
はだれ雪の小山に朝の日のさせば笛吹きながら氷がとける
夕日かけ枯草動くひとところ雀寄りあい草の実拾う
ものの芽のわからぬちは抜かずおくどんな未来があるやもしれず
色鉛筆中の一本灰色が使ってほしいとねきん出て言う
黒きペンの太文字書けば灰色の線は銀なるかがやき放つ
宮大工になるのだと言う少年の征目をなするかがやくひとみ

横田敏子

雪を待つ

・福

新しき手帳に記す「今日は雪」一月一日静かに暮れぬ
コロナ忘れ命あふるる春愛でん新緑まとう街が膨らむ
「おはよう」と声はませて友の来る溢るほどの紫陽花抱え
うしる脚思いきり伸ばし三毛猫は夏の木陰をのっそり出で来
包丁を入れてさっくり手に割きし白菜の芯のまばゆき黄色
小春日の続く霜月青空を叩けばキーンと音聞こゆるや
大榎は円錐形の雪吊の中に鎮座し雪を待ちおり

復興が風化を誘う日の本に墜ちてしを知れ原爆一発
ピカツ！ ドンは覚えぬ崖下にたたきつけられし十三の乙女
爆心下一キロメートルよくぞよくぞ今日迎えたり八十九歳
長崎は百万ドルの夜景かやさもあらばあれ妻の体調
人生をえたる被爆変わらざる終活うつろこれが人生
地中海本田顯子女史颯爽と参院予算委質問に立つ
覚悟して臨みいるとのコロナ禍に立ち向かえ女史祈る終結

磯田ひさ子

離の辺に

・森

きさらぎの光の中に嫁きし子が桃の花束抱へて来たり
子育てを終へたる娘の上吉ひな人形を正しく飾る
長持も鞆籠も飾りて間を少しどとればかがやく女雛と男雛
言ひたきは言はざるいくつほろほろと桃の蕾はこぼれ易くて
近づけば火傷するゆゑほどほどの距離を保つを身上とする
あはきいろ寄せたるあはきひなあられ美しきもの令和にもあり
こののちに幾たびまみゆる雛の辺に病みるる夫とほのほのと坐す

市原志郎

小犬

・萬

やがて寒きものに変わるかガラス戸を打ちて去り行く朝の風音
アメリカ大統領選喧し朝のテレビは何処回しても
リハビリの終わりて飲むを慣いとしコーヒー甘さ控え目ににして
リハビリを終わればそっと新聞を手渡しくる妻はやさしく
ウイルスに関係のなき報道をのんびり聞く昼過ぎのテレビ
真白き小犬にマロと名を付けて抱き来る末の孫の愛らし
妻の手のゆっくり動くテーブルに二人の皿が並び行くなり

市原やよひ 化身

・萬

ボインセチア膝に置きたる夫乗せて車椅子に行く田の中の道
抱え来しボインセチア置く窓辺コロナの一年終わらんとして
星空はそのままにしてと咲きて探査機帰還のニュースを聞けり
弟の化身か黒き揚羽蝶しばし留まる我の前にて
集うこと叶わぬ老齢四姉妹電話に懶ぶ弟の忌を
姿なき蟬鳴きつる大けやき古き酒屋の庭を占めおり
「玄関につばめ来てたよ」さりげなく言いて高校生の孫帰り来る

梅本武義

寿命

・羊

目覚めには老化防止に腕伸ばし指の運動小指が痛む
若き日の今に見れるの氣概消え見せるもの無く傘寿近付く
十五年までの寿命とふと思ひ十五年前を顧みるとき
コロナ禍に連絡取らず居りし友喪中のはがきとなりて来るとは
衰えを言いつつ動く妻と居てわが衰えは言わず動かず
百年に一度がたびたび起きる世か裏山の耐える雨量を思う
人は減り放棄田増えて獸増ゆわが里に見る日本衰退

大浪美雪

千年紀

・森

千年も前のをみなの日記に見る上総国は「あづまちのはて」
夕やみに火を噴く煙突 孝標の娘の見しは燃ゆる富士ヶ峰
春立つ日上総の野辺に萌えいづる若菜摘みしや孝標の娘は
条里制のなごりの遊る田のなかを首筋育き雉の横切る
草の穂に止まる玉虫孝標の娘の葛籠の裔にありしか
孝標の娘の祈りし薬師仏遣らむものかどこかの祠に
孝標の娘の通りし古代道 農道となり耕耘機ゆく

奥田陽子 母

・羊

窓の辺に歌いてひとり母ありき入院の日日重ねたる頃
病室の些事訴えて母ありしをやさしき言葉もたざりしわれ
母として花の季節と知らざらん子をさとす声受話器に聞こゆ
一票の平等を語り揺るがさる言葉ありて今日憲法記念日
食乞しき子等コロナ禍に増えゆくを聞くのみに居てさむき年の瀬
絶え間なく波の洗える石の上飛沫浴びつつ鳥は水干す
良き声を神に選ばれざりしかな鳴き声置きて翔び立つ尾長

小野雅子

アマビエ

・羊

立ち上がるたび足もとに落ちてゐる膝掛ふみて一二歩あゆむ
恵方巻、立春に豆腐 知らず來し慣はしに染まりゆくも染しき
弾むやうに歩いて朝の道をゆく制服の白あらたな少女
幼き日の力士の四股名うかびくる大横綱はいつこにゆきし
地中ふかく素数の年を数へるセミの頭脳 よヒトを凌ぎて
なにごともなきわが十年 零歳が十歳になり翌年を言ふ
アマビエを飾る熊手も並びたるテレビ画像に見る酉の市

久我田鶴子

月光坂面

・羊

見上げると見せてしまふ傷 包帯を巻かれるし日の月光坂面
群れたくはないなどなんの宣言をするまでもなくなるやうになる
勝負が洩れれば己が身溶かさるるヒトの身体の仕組みいまさら
合鍵を渡されたるは手術前ひとり暮らしの友に呼ばれて
検査にて見つかりしもの取り除き瘦せるし友のさらに九キロ
種を蒔き育む余裕もたざれば今年は朝顔あきらむと言ふ
明珍のひびきのなかに風がるて忘れたやうにもたてつづけにも